

【使徒書日課】使徒言行録 27章33～44節

³³夜が明けかけたころ、パウロは一同に食事をするように勧めた。「今日で十四日もの間、皆さんは不安のうちに全く何も食べずに、過ごしてきました。³⁴だから、どうぞ何か食べてください。生き延びるために必要だからです。あなたがたの頭から髪の毛一本もなくなることはありません。」³⁵こう言ってパウロは、一同の前でパンを取って神に感謝の祈りをささげてから、それを裂いて食べ始めた。³⁶そこで、一同も元気づいて食事をした。³⁷船にいたわたしたちは、全部で二百七十六人であった。³⁸十分に食べてから、穀物を海に投げ捨てて船を軽くした。

³⁹朝になって、どこの陸地であるか分からなかったが、砂浜のある入り江を見つけたので、できることなら、そこへ船を乗り入れようということになった。⁴⁰そこで、錨を切り離して海に捨て、同時に舵の綱を解き、風に船首の帆を上げて、砂浜に向かって進んだ。⁴¹ところが、深みに挟まれた浅瀬にぶつかって船を乗り上げてしまい、船首がめり込んで動かなくなり、船尾は激しい波で壊れだした。⁴²兵士たちは、囚人たちが泳いで逃げないように、殺そうと計ったが、⁴³百人隊長はパウロを助けたいと思ったので、この計画を思いとどまらせた。そして、泳げる者がまず飛び込んで陸に上がり、⁴⁴残りの者は板切れや船の乗組員につかまって泳いで行くように命令した。このようにして、全員が無事に上陸した。

【福音書日課】ヨハネによる福音書 6章16～21節

¹⁶夕方になったので、弟子たちは湖畔へ下りて行った。¹⁷そして、舟に乗り、湖の向こう岸のカファルナウムに行こうとした。既に暗くなっていたが、イエスはまだ彼らのところには来ておられなかった。¹⁸強い風が吹いて、湖は荒れ始めた。¹⁹二十五ないし三十スタディオンばかり漕ぎ出したころ、イエスが湖の上を歩いて舟に近づいて来られるのを見て、彼らは恐れた。²⁰イエスは言われた。「わたしだ。恐れることはない。」²¹そこで、彼らはイエスを舟に迎え入れようとした。すると間もなく、舟は目指す地に着いた。

舟に乗って行こう【こども説教のために】

家族や仲間同士で旅行する楽しみの一つは、その行き帰りの道中にあります。目的地を目指して、自動車や鉄道、飛行機や船に乗っている間、わたしたちは、旅先での計画を話したり、他愛もないおしゃべりをしたりしながら、親しく過ごします。ときには、たまたま同じ乗り物に乗り合わせただけの隣席の人と会話をして、親しく時を過ごすこともあるかもしれません。

主イエスは、三年間、旅を続けながら「神の国」の教えをされましたが、その旅を一人ではなさらず、弟子たちを伴われたのです。最初は、ガリラヤ湖で漁師をしていた四人、シモン＝ペトロとアンデレ兄弟、ヤコブとヨハネ兄弟が、主イエスの旅に加わりました。その後に加わった弟子たちのうち、十二人は最後まで旅を共にしたようです。もちろん、その間には、旅の先々でいろいろな人と過ごすときがあったでしょう。五千人もの人と一日を過ごして、最後に主イエスはその人たち皆にパンと魚を分けてくださるといような出来事もありました。

主イエスが十字架につけられて死んで葬られ、三日目にご復活なさった後、主イエスと共に旅をしたことを忘れられない人たちが十二人の弟子たちと共に集まり、「教会」となりました。その人たちは、主イエスと歩んだ旅を、なお続けたいと考えたのです。ご復活された主イエスは天に昇られてしまいましたが、自分たち旅する者たちの集まりの中にあの主イエスが共にいてくださると信じて、旅を続けたのです。一つの集まりだった「教会」は、分かれて世界中に出て行って旅を続けました。わたしたちの「石神井教会」も、そのような旅をしてきた先輩たちによって、ここにたどり着いたのです。

主イエスが十二人の弟子と旅をしていたとき、舟で湖を渡って行くことがしばしばあったようです。主イエスの旅は、ガリラヤ湖の周辺を巡ることが多かったのです。その湖で漁師をしていた弟子たちが、舟を出してくれたのかもしれませんが。漁師たちは、舟や湖のことであれば専門家です。それでも、強い風が吹いて湖面が荒れたときには、舟の操縦に苦心したかもしれません。思い通りに舟が進まず、皆の気持ちが乱れてしまうこともあったことでしょう。主イエスが船と一緒にお乗りになられていなかったときには、弟子たち同士で喧嘩になったかもしれません。そこに主イエスがいらしてくだされば、弟子たちはどんなにか安心したことでしょうか。弟子たちの旅は、主イエスが行き先をご存じで、お連れくださっているものだからです。

弟子たちの乗る舟に、主イエスは湖の上を歩いて近づいて来られました。「わたしだ。恐れることはない」と。「教会」という船に乗るわたしたちも、水の上を近づいて来られる主イエスをお迎えして、主イエスの導いてくださる目的地を目指して、旅を続けているのです。

全部で二百七十六人

教会堂の大規模修繕工事も佳境に入っています。屋根の葺き替えと外壁塗装がおもな工事ですので、普段の礼拝や集会で用いられる場所が目に見えて新しくなるというようなことはありません。今回の工事の一番の目的は、この会堂を長く用いていくための手当です。費用がかかる割には見返りが少ないと思われる方もあるかもしれません。外見よりも中身が大事、と思われる方もあるでしょう。確かにそうですが、そうは言っても、わたしたちの教会堂がどのように見えるかということも大切でしょう。

わたしたちは、どこかの教会に行けば、建物内の礼拝堂の佇まいや、そこで執り行われる礼拝を見て、どのような教会か判断します。けれども、多くの人は、教会をまず建物で認識するのです。薄汚れた建物であれば、「薄汚れた教会」と認識するでしょう。新しい建物であれば、「新しい教会」と認識するでしょう。古くても大切に維持されている建物であれば、「受け継いだ古いものを大切に作る教会」と認識するでしょう。

教会堂の化粧直しをして、わたしたちは、周囲の方々に、「見られてもよい教会」として認識してもらいたいです。わたしたち教会が、周囲の方々に見られてもよい姿を示す者になりたいのです。できれば、わたしたち教会が目指している目的地に向かう旅の道連れとなってご一緒していただきたい。そのような思いを示せる教会堂の姿をお見せしたいのです。

初代教会の歩みを伝える「使徒言行録」は、弟子たちの「旅」の物語として記されています。殊に後半のほとんどは、パウロと彼の仲間たちの「旅」の物語りです。その物語の中でパウロが語っているように、初代教会の弟子たちは、自分たちのことを「《主の道》に従う者たち」と呼んでいたようです。それは、主イエスの生き方に従う、という意味で言われたのでしょう。しかし同時に、そこには、主イエスが弟子たちと共にしてくださった「旅の道」の記憶が重ねられていたに違いありません。

「使徒言行録」の最終盤、パウロと仲間たちは、ユダヤの地からローマに向けて船で旅をしています。その船には、もちろん、パウロたちだけが乗っていたわけではありません。彼らを監視する兵士たち、彼らと共に護送される囚人たち、多くの船乗りたち、また他にも同船客があったかもしれません。合わせて二百七十六人。そのほとんどは、「教会」のメンバーではありませんでした。けれども、パウロら「教会」のメンバーが、そうではない多くの人々と共に地中海を渡って行った船旅の物語を、教会の先達は、大切な「教会の物語」として「使徒言行録」の中に収め、伝えてきたのです。この物語が「旅する教会」の姿を示している、と教えてきたのです。

二百七十六人全員の救い。それが、教会の大切にしてきたことなのです。

元気になるパン

嵐の中、パウロは、同船者らに食事を勧めました。十四日もの間、皆、何も食べずにいたのです。今にも舟が沈没してしまうかもしれないというときに、誰も食事をしようとは思えなかったのでしょうか。パウロとて、そうだったのかもしれませんが。けれども、パウロはその日、夜中のうちに天使に告げられていたのです、「パウロ、恐れるな」（使徒 27:24）と。そして、パウロは、同船者らに勧めたのです、「**どうぞ何か食べてください。生き延びるために必要だからです**」と。

パウロは、ある意味では、非常に冷静になって、食事を勧めたと言えるかもしれませんが。これから、嵐の中を上陸するためには、皆に体力が必要です。緊迫した状況の中で空腹を感じていないとしても、何日も食事をとっていない状態では、海の中を泳いでいかなければならなくなったとき、体力がもちません。また、食事をして安心感を回復できれば、いざと言うときにも冷静な判断ができるものです。

もちろん、パウロがそこまで考えていたかどうかは、わかりません。そのような考えはなかったかもしれませんが。けれども、結果として、そうなったことは確かです。そうなるように、パウロは導かれたのです。パウロは、「パン裂き」に導かれたのです。主イエスをお迎えする「パン裂き」です。

パウロは、一同の前でパンを取って神に感謝の祈りをささげてから、それを裂いて食べ始めた。それは、主イエスと最後の晚餐を共にした弟子たちから受け継いできた「主の晚餐」の「パン裂き」に他なりませんでした。初代教会の人々は、日々の集まりごとに「パン裂き」をして「主の晚餐」を記念し、主イエスを自分たちの集まりにお迎えしてきたのです。「パン裂き」をするところに主イエスがお出でくださる、と信じて。

主イエスが弟子たちだけを舟に乗せて湖を渡らせたとき、彼らは主イエスが共に舟にお乗りになられないことを不思議に思わなかったのでしょうか。そのとき、彼らは、主イエスが五千人にパンを分けてくださった出来事を体験したばかりでした。「パン裂き」の出来事を弟子たちにお示くださった主イエスは、ご自身が同船されなかった弟子たちの舟に現れてくださり、彼らに迎えられたのです。弟子たちは、そこで何が起こったのか、理解しなかったのかもしれませんが。けれども、彼らの教会は、理解しました、「パン裂き」をして「主の食事」を思い起こすとき、そこに主イエスがおいでくださる、と。

パンを裂き、主イエスを記念して食事をする者たちの姿を、パウロは同船者らに見てもらおうとしました。生き延びるためです。皆が生き延びるためです。すべての人が救われるために、主をお迎えする教会は、食事を共にする者の姿をこそ、人々の前に示して歩むのです。